

徹底的行動主義に基づく「八正道」の起点

— 「今」, 「ここ」で, それを具体化・行動化する—

Noble Eightfold Path on radical behaviorism for advancing for normal life at starting point

○渡辺 修宏¹, 小幡 知史²

Watanabe Nobuhiro, Obata Satoshi

国際医療福祉大学¹, 障害児通所支援事業所樹の子クラブ²

International University of Health and Welfare, KINOKO club

Key words: Noble Eightfold Path, radical behaviorism, starting point

目的

八正道は、仏教の要諦の1つである(多屋・横超・舟橋・藤田, 1995)。渡辺・小幡(2020:2021)はこの八正道を、仏教に帰依する者にとっての修行としてだけでなく、広く、私たちヒトの人生・生活における営みとして考察した。すなわち、具体的な日常生活における行動レベルにおいて、特定の場面、状況、文脈において「正しい」とされる行動を選択すること・選択し続けることと整理した。このような行動レベルへの転換は、行動科学、畢竟、徹底的行動主義を哲学的基盤とする行動分析学の知見に基づく考察であった(渡辺・森山, 2015:2016)。またここでいう「正しさ」とは、その人(ヒトとしての個)とその種の存在可能性を高めるか、あるいは低めないか、またはその両者に該当するかどうかで規定されると述べた。

一方、その「正しさ」の規定に際しては、存続可能性をどのような時間軸で、あるいは空間軸で評価するのかという課題(行動機能の時間的範囲と空間的範囲の設定)が指摘された(渡辺・小幡, 2021)。この場合における軸は、その可能性を捉える範囲や規模と言い換えたほうが適切かもしれない。いずれにせよ、例えば、短期的ないし小規模範囲でとらえる「正しさ」は、長期的ないし大規模範囲でとらえる「正しさ」と矛盾するという課題であった。この課題の解決を目指すには、生物学や物理学、あるいは宇宙物理学や量子力学などの知見を頼りながら、壮大で広大な諸問題と向き合わねばならず、相当な労力と時間が求められよう。そこで本稿は、まるで真理への探究となるようなそのような冒険は一旦諦めて、まず、齢百年前後の寿命を生きる我々ヒトの、極めて限定的な営みの範囲において、八正道行動の内容と意味を考察したい。

方法

本稿は、ヒトにおける八正道行動の内容と意味を、徹底的行動主義を哲学的基盤とする行動分析学の理論に基づいて考察する。

結果

徹底的行動主義と行動分析学の理論と技術に基づいて八正道を行動レベルで捉えるならば、それは、個としてヒト、集団としてヒト(地域、社会、国家等)の活動、健康、命、あるいは存続可能性を高める行動群となる。これは必ずしも法律遵守行動、あるいは社会通念・一般常識・各種宗教の教義・規範等に基づく行動とは限らない。多様な文化、宗教、風土、歴史、その時点の社会事象等の影響を受けて整備・改訂・解釈されるそれらは、行動分析学の知見とはまた異なる発想によって構成されることが少なくないからであ

る。行動分析学の枠組みとは、言うならば生物学、生態学、あるいは進化論的な捉え方に近似している。その意味で、ヒトそのものだけに注視することも誤りとなる。ヒトを取り巻く他の生命体、さらには地域、国、自然環境、場合によっては地球そのものの環境状態にまで考慮範囲を広げなければ、われわれヒトの活動、健康、命の存在可能性が危ぶまれるからである。いわゆる Sustainability 問題である。

このように考えると、ヒトの一生という時間軸、空間軸だけを対象としても、先に述べた「行動機能の時間的範囲と空間的範囲の設定」は容易になるわけではない。従って、より具体的な検討を行うためには、さらに範囲を狭めるか、あるいは、その捉えるべき範囲や規模の限定ではなく、どこからはじめるかという起点の設定が必要かもしれない。また、ヒトを個体だけで捉えず、他者や周囲との関係で捉えるならば、ある者にとっては「正しい」行動であってもそれをそのまま他者に適用することが困難なことも起こり得る。つまり、一律に、普遍的な八正道を語ることもまた容易ではないのである。個にとってのそれ、非個にとってのそれはまた別に議論する必要があるかもしれない。この問題を踏まえると、まずは議論の起点を示さねば、本論を展開することがままならないと考える。

そこで本稿は、便宜上、「今」、「ここ」、という起点を設定することとする。すなわち現在という時間軸における局所と、ここで、という直近の空間軸である。このような起点であればすべての人に適用可能であり、また、多くの方々にとって理解しやすいと考えるためである。そしてこの起点から八正道を考慮するならば、今ここで、私は「どうする(行動)」のか、またそれは「どうなるのか(行動の結果と影響)」という極めて現実的かつ具体的にしかるべき行動群を提案し、かつ実践し、そして検証することができるようになるだろう。そして当然、その提案・実践・検証には、個としてのヒトのみならず、集団や社会といった複数視点からの評価が必要不可欠といえるだろう。つまるところ、「今ここ」での行動が、その行動の「即時結果」からその行動主体の一生という時間軸内における「中長期結果」までの範囲内において、「私」「あなた」「それ以外」の3者全てにとって「(存続可能性の点から)正しい」とされるならばそれは八正道行動と呼べよう。

本稿はヒトの生涯という限定範囲から、そして「今ここ」という起点に基づいて、八正道行動の局在的な見解を得た。但しこの見解に基づく具体的な行動群の中身と、またそれらの行動が本当に「正しい」と評価されるかの検証は今後の課題となった。